



〈連載〉小論文ブックポート⑧

●浅野智彦・著 (岩波書店 〈定価1575円+税込〉)

『若者の気分』

『趣味縁からはじまる社会参加』

日本でここ20年余りよく聞かれる若者への声は、「公共心が無い」「ジコチュー(自己中心)」「仲間だけで集まる」「内向き」などネガティブなものが多かった。だが中には若者の実像から両義性を探る冷静な議論もある。

このような議論の一つとして、今号では浅野智彦著『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』(岩波書店)を読む。本書はいわゆる「新しい公共」(国や企業、家族に代わり、人々の生活を支えるNPOや市民活動などの動き)の一つとして「趣味縁」に注目し、若者が社会参加する可能性を考察したものである。その一つのメルクマールとして記されているのが、2007

年6月に秋葉原で数百人のコスプレをした若者たちが「表現規制の強化」などに反対した、「日本初のオタクのオタクによるオタクのためのデモ」である。さらに10年3月には、東京都議会に定員の約3倍にあたる300人が集まり、都による「青少年健全育成条例の改正案」阻止を求めた。その参加者の多くがマンガやアニメなど「オタク的趣味」を持つ若者たちだった。オタクには「社会参加からは遠いイメージ」を持つ人が多い。だが先の事例から「そのオタク的趣味でさえ、ときに政治的な声を上げるための通路になる」と著者は言う。「趣味縁」に存在する社会参加への入り口である。

濃密化、地元化する友人関係 著者はまず、現代の若者の「友人への意識」を見る。そこで明らかにされたのは、「友人関係の重要性の上昇」「友人関係の充実度の上昇」「友人関係の常時接続化」である。例えば世界青年意識調査によれば、自分が学校に通う意義を「友だちとの友情をはぐくむこと」とする答えが日本では最多で、90年代から一貫して増えている。また「生活の中でどんなときに充実感を感じるか」では「友人や仲間といるとき」が最多となっている。この「友人関係の充実」と関連づけられるのが、「若者の地元志向」だ。著者は「『地元』が

評価されるのは物理的配置や機能性よりも人間関係、なかでも『友だちとの関係が重要』なためであり、「その土台となっている地域に対しても愛着をもって『地元志向』は『友人志向』の現われなのである。そして携帯電話などのコミュニケーション・メディアは親密性を加速させる。これが「常時接続の仲間集団」である。このような友人関係の濃密化が若者の自己のあり方をどう変化させていくのか。著者は「自己はいつでも他者との関係の中で形成され、維持される」と言う。自己がまずあって他者と関係を取り結ぶのではない。哲学者のハンナ・アレントの言を借りると、「ウェブ的自己」だ。重要なのは「若者の間ではむしろそのような関係論的な認識の方が常態になりつつある」との指摘である。 こうしたウェブ的自己の傾向が強い若者のもう一つの特徴が、「関係優先志向」である。その一例として挙げられているのが、数年前に話題になった「便所飯」

である。これは主に大学生が学内で一人で昼食を取る姿を見られたくないとの理由で、トイレの個室で弁当を食べる様子を目指すものである。「一人でいるところを知り合いに見られたくない」との感覚は、「親しい相手がいないことに傷つく」「知り合いから親しい友人がいると承認されたい」という心理で、「二重の意味で関係に依存している」と著者は分析している。

このように、人間関係への感度も依存度も高いウェブ的自己は、その都度、関係の文脈を読み取ってそれに合わせて自己を提示させていく。これが「自己の多元化」だ。今の若者は様々な世代や場面に応じて柔軟にソツなく付き合うとよく言われる。これがまさに、ウェブ的自己の多元性の表れということだろう。

社会関係資本としての趣味縁

こうした「多元化する自己」を持つ若者が、公共性に向かう回路として著者が期待するのが「趣味縁」である。趣味縁とは「趣味によってつながる人間関係」であり、地域の草野球や市民オーケストラからコミックマーケット(コミケ)に出席する同人誌サークル、歌舞伎鑑賞グループまでかなり幅広い。著者は「この趣味縁もまた、公共性に関係しているのではないか」との仮説を立てる。趣味縁と公共性を結ぶ補助線として用いられているのが「社会関係資本」という概念である。これは、「ある社会関係自体が利得を得るための元手になっているような場合」を指す。例えば「よりよい転職先を紹介してくれる友人関係を多く持っている人」は多くの「社会関係資本」を有していると言える。

社会関係資本については、資本が生み出す利得を「もっぱら資本の所有者が享受する」という考え方と、「所有者以外の人

も含めた共同体全体に享受される」という二つの考え方があり、著者は後者の立場に立つ。社会関係資本と共同性との結び付きを掘り下げた一人が政治学者のロバート・パットナムである。パットナムは社会関係資本を「社会的ネットワークとそこから生じる互酬性と信頼性の規範であり、『市民的美徳』と密接に関係している」と見る。これは「一般的信頼」とも呼ばれ、「自分とは異なる他者、顔の見えない他者に対する信頼」のこと。一般的信頼を持つ人々は「自分たちの利益を追求するだけではなく、社会や共同体の利益をも考えて行動するはず」と考えるため、彼らが多いほど民主政治はうまく機能する。

なぜ趣味縁は一般的信頼に結びつくのか。著者は趣味縁の三つの特徴「趣味への愛が深いほど、内部に強い葛藤を生み出すこと」「その葛藤は趣味への愛によって克服されること」「克服の過程の要が、尊敬や敬意などの承認関係」を見る。オタクを描く『げんしけん』と高校の

マンガ研究会の青春模様を描く『フラワー・オブ・ライフ』という二つのマンガから、趣味仲間が様々な葛藤を抱え、共に高みに向かう様子が例示されている。さらに本書では「趣味縁がどの程度社会参加に結びついているのか」を歴史的に考察すると同時に、若者たちへの趣味と社会意識・行動に関する調査から複合的に検証していく。

趣味縁を持つ人にはうなずける本書。ただし趣味縁が即、公共性に結びつくわけではない。趣味を持つ人は他にも様々な活動を行うなど多元的であること、趣味縁が若者の「地元志向」と結びつくことで社会参加への糸口の可能性があることなどが、丁寧に議論されている。 なお、著者らの調査では「高校での部活動」は、「公共性」「社会参加」には結びついていなかった。自発的に形成・加入されない集団の場合、先述した趣味縁の意義が期待できないのは、との仮説は、学校関係者としては心すべきことだと思われる。(評)福永文子